

國學院大學學術情報リポジトリ

頼山陽竹枝詞の特徴及びその位置付け

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 竹枝詞, 頼山陽, 日本漢詩 キーワード (En): Chikushi Poems , Rai Sanyō , Japanese Kanshi 作成者: 李, 曉玲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001640

頼山陽竹枝詞の特徴及びその位置付け

A Study on the Characteristics and Positioning of Rai Sanyō's Chikushi Poems

李 曉 玲

キーワード：竹枝詞 頼山陽 日本漢詩

Key Words: Chikushi Poems Rai Sanyō Japanese Kanshi

要旨

頼山陽は、文政元年(1818)の九州旅行中に「西遊詩」と呼ばれる一連の漢詩を詠み、これを自撰の『山陽詩鈔』に収録した。その中には「赤関竹枝」「長崎謡」「薩摩詞」などの竹枝詞が含まれている。山陽は、竹枝詞の要諦を「質俚儉儻の中に縹緲の音を寓す」ことにありと捉え、地域の風土や民俗を記録し、後世の考証に資することを強調している。そのため、彼の竹枝詞には地域性と時代性が深く刻まれ、文学的な趣も兼ね備えている。さらに、山陽の竹枝詞は、従来の遊廓文化と結びついた日本の竹枝詞とは異なり、「紀行詩」としての性質を帯びていると考えられる。「外来者」の視点から地域の特性を描写することで、日本の竹枝詞に新たな方向性を示した。このことにより、日本の竹枝詞は本来の姿である「風土詩」へと回帰する姿勢を見せたと思われる。

Abstract

Rai Sanyō, during his travel to Kyushu in 1818 (Bunsei 1), composed a series of Kanshi known as “Saiyu-shi”(Poems of the Western Journey), which he later included in his *Sanyo Shisho* (The Collected Poems of Sanyo). Among these poems are several Chikushi poems, including “Akaseki Chikushi,” “Nagasaki-yo,” and “Satsuma-shi.” Rai Sanyo regarded the essence of Chikushi as embedding “a transcendent tone within the rustic and simple,” emphasizing its role in documenting local culture and customs for future generations. As a result, his Chikushi poems are imbued with a profound sense of regionality, historicity, and literary refinement. Furthermore, unlike traditional Japanese Chikushi poems, often tied to the culture of Yukaku, Sanyo’s work embodies the qualities of travel poetry, depicting the character of each region from the perspective of an “outsider.” This approach suggested a new direction for Japanese Chikushi poetry, reviving its original essence as Fudo-shi (“poetry of local customs and landscapes”).

はじめに

竹枝詞は元々中国の巴渝地方で流行した民謡であり、唐の劉禹錫らによって世

間に広がった。中国の竹枝詞は、地方の風習や見聞の記録に主眼を置かれてきたのに対し、日本に伝入した竹枝詞は、漢詩壇の詩風変遷を経て「変異⁽¹⁾」し、江戸中後期になると、遊廓文化と深く結びつくようになった。その中で、頼山陽は独自の視点を持つ特異な存在として浮かび上がった。

頼山陽(1781-1832)、名は襄、字は子成、通称久太郎であり、『日本外史』の著者として歴史家の名声を馳せ、漢詩人としても高名を博した。文政元年(1818)に九州を旅した際、彼は「西遊詩」と呼ばれる一連の漢詩を詠み、これを自撰の『山陽詩鈔』巻三と巻四に「西遊稿」として収録した。その中には「赤関竹枝」「長崎謡」「薩摩詞」などの竹枝詞も含まれている。

従来の研究において、これらの竹枝詞は「西遊詩」の一部として扱われることが一般的である。たとえば、三宅樞台⁽²⁾、奥山正幹⁽³⁾、蜂谷柳莊⁽⁴⁾、伊藤靄谿⁽⁵⁾の諸氏は、『山陽詩鈔』を底本として注釈を行っており、これらの竹枝詞もその対象としている。また、谷口匡氏は『山陽先生真蹟西遊詩』(「西遊詩卷」とも呼ばれる)に訳注を施し、特に下関に関する詩作に注目し、詩に反映されるその地域の風土や人情を考察している⁽⁶⁾。さらに上野日出刀氏は、頼山陽が長崎に滞在中に詠じた漢詩に焦点を当て、幕末の長崎の歴史や頼山陽の経歴などを踏まえた研究を行っているが、「長崎竹枝」六首のみの解釈にとどまっている⁽⁷⁾。蔡毅氏は上記の作品を漢詩日本化の産物として捉え、頼山陽のイノベーションが見られると指摘しており⁽⁸⁾、張鳳氏は蔡氏の見解を引き継ぎ、頼山陽西遊詩における思想性と芸術性を考察し、「薩摩詞」を「風土詩」と位置付けている⁽⁹⁾。しかし、両氏ともそれらの作品を「竹枝詞」として扱っていない。

このように、頼山陽の竹枝詞は「西遊詩」の一部として捉えられることが多く、「竹枝詞」自体の特殊性に焦点を当てた独立した研究は十分に行われていない。

(1) 厳紹璽氏が提唱した「文学発生学」の「変異体」(variants)理論による。厳紹璽、『比較文学与文化変異体研究』。復旦大学出版社、2011年。

(2) 三宅観校注、『山陽詩鈔集解』。佐々木惣四郎、1881年。

(3) 奥山正幹校注、『山陽詩鈔註釈』。山陽詩鈔出版会、1914年。

(4) 蜂谷柳莊校注、『山陽詩鈔註釈』。大鑑閣、1919年。

(5) 伊藤靄谿校注、『山陽詩鈔新釈』。山陽詩註刊行会、1942年。

(6) 谷口匡、『西遊詩卷：頼山陽の九州漫遊』。法藏館、2020年12月。

(7) 上野日出刀、『長崎に遊んだ漢詩人－附記宋明儒者の詩』。中国書店、1989年。

(8) 蔡毅、「試論頼山陽對中國古典詩歌傳統的繼承和創新」、『日本漢詩論稿』。中華書局、2007年。

(9) 佐藤利行、李均洋、趙敏俐主編、『菅茶山・頼山陽漢詩研究』第十二章。商務印書館、2018年。

そこで本稿では、頼山陽の竹枝詞創作と言説を通じて、彼の竹枝詞の特徴を明らかにしたい。また、頼山陽の竹枝詞を日本竹枝詞史という広い視野で再評価し、「紀行竹枝」としての位置付けを再構築することを目的とする。

一、頼山陽の竹枝詞創作

文政元年（1818）、39歳の頼山陽が父春水の三回忌法要のために広島に帰省し、その後の三月六日に九州遊歴の旅に立った。広島を出発した山陽は、下関を経て九州に入り、博多、長崎、熊本、鹿児島など各地を巡りながら、旅の途上で「赤関竹枝」「長崎謡」「薩摩詞」などの竹枝詞を創作した。

1. 赤関竹枝

「赤関」、また「赤間関」とも呼ばれ、現在の下関市。『山陽詩鈔』では八首を収め、主に先帝会の情景と赤間関の繁栄とにぎわいを描いている。下関にある赤間神宮で毎年行われる先帝祭は、古くから有名で、壇ノ浦で入水した安徳天皇を追悼する祭りとして伝わっている。木崎好尚氏の研究によると、山陽は三月二十四日に「秋水と甲柳庵の案内で、阿弥陀寺の先帝会（安徳天皇御陵）を拝し⁽¹⁰⁾」、「赤関竹枝」の最初の二首はその場で見た情景を詠んだものとされている。

可憐兒女説先皇、幾隊紅妝幾瓣香。簪笏滿前人不見、金釵猶作鷺鷥行⁽¹¹⁾。

読み下し：憐れむべし 児女の先皇を説くを、幾隊の紅妝 幾瓣の香。簪笏前に満ちて人見えず、金釵 猶鷺鷥の行を作る。

託蹠蛟宮歳幾過、水邊猶見舊宮娥。至今許著輕羅襪、應記朝天凌綠波。

読み下し：蹠を蛟宮に託して歳幾か過ぎ、水邊猶見る 舊宮娥。今に至りて著することを許す 輕羅の襪、應に記すべし 朝天 綠波を凌ぐを。

(10) 木崎愛吉、『頼山陽』、新潮社、1941年、p204。

(11) 本稿における頼山陽詩の引用は全て『山陽詩鈔』により、訓読は前記の奥山正幹、蜂谷柳庄、谷口匡諸氏のものを参照した。

「幾隊紅妝幾瓣香」「金釵猶作鷺鷥行」「至今許著輕羅襪」などの句は先帝祭を参拝する遊女の姿を描写したもので、これは「上臈参拝」として知られている。「上臈」とは身分の高い女官を指し、安徳天皇に仕えていた彼女たちは生計を立てる手段として遊女になった。命日には安徳天皇の御霊を慰めるために、御廟所に訪れ、冥福を祈るために参拝することがその起源とされている。

この二首の詩には「毎歳三月諸倡詣阿弥陀寺称先帝会」、「倡著鞆佗處所無云」との注が見られる。また、山陽自筆の『山陽先生真蹟西遊詩』において、「赤関竹枝」の最後に「關頭阿弥陀寺、安養和帝像。毎歳暮春幾望、妓女成隊進香、曰先帝會。海内妓院、許穿羅襪者、唯赤関耳。稱養和宮人之遺傳承至今。⁽¹²⁾」という注もあり、詩の自注と呼応しつつ、先帝祭における情景への深い洞察と思考が打ち込まれていると思われる。

2. 長崎竹枝

下関を立ち、博多で二十日間逗留し、五月の下旬に長崎に到着した頼山陽は、「長崎謡十解」と「長崎雑詩」を詠み、これらの竹枝詞は長崎での対外交流の実態を描写している。例えば、「長崎謡十解」の第二首、

入港西洋賈客船、譙樓信砲數聲傳。兩藩戍卒森旌戟、萬炬如星夜不眠。

読み下し：港に入る 西洋賈客の船、譙樓の信砲 数声伝はる。兩藩の戍卒 旌戟森たり、萬炬星の如く、夜眠らず。

この詩はオランダ船が入港する時の情状を詠じた。第二句の「譙樓」は城門の上の望楼をいい、「信砲」は情報を伝えるための鉄砲である。第三句の「兩藩」は肥前の鍋島氏と筑前の黒田氏をいい、幕府の令によって長崎を警備する。「森」は物が多く並ぶさまをいう。杜甫の詩に「況潮小篆逼秦相、快劍長戟森相向」（「李潮八分小篆歌」）とある。ここでは旗と戈が森然と並んでいることを指す。この詩では当時長崎の対外の警備政策一斑を窺うことができると思われる。洋船が入港すると、望楼からはすぐに合図の鉄砲の音が伝わってくる。黒田氏と鍋島氏の兵卒たちは森然と並んで警備し、無数のたいまつは星のように夜空を灯し、眠

(12) 頼山陽、『山陽先生真蹟西遊詩』。河南源吉、1886年。

らない夜である。文化五年(1808)のフェートン号事件により、長崎警備の見直しと強化が迫られた。前車の覆るは後車の戒め、この詩が作られたのはその十年後の1818年、厳重な警備態勢は変わらなかった。

また、「長崎謡十解」の第八首、

盈盈積水隔音塵、穿眼來帆阿那邊。自慰吾儂勝織女、一年兩度逐郎船。

読み下し：盈盈たる積水 音塵を隔つ、眼を穿つ 來帆は阿那邊。自ら慰む吾儂織女に勝り、一年兩度郎船を逐ふ。

この詩は一人の遊女が清国に帰っている情夫のことを待ちこがれている様子を詠んでいる。首句の「盈盈」は水の満ちるさまをいい、ここでは「積水」すなわち海のことをいう。「古詩十九首」其十には「盈盈一水間、脈脈不得語」とある。第二句の「阿那邊」は唐の時代の口語で、どちらという意味である。李白の詩に「万戸垂楊里、君家阿那邊」(「相逢行」)とある。末句の「逐」はむかえるという意味で、情夫来崎の船は一年に二度むかえることができ、織女よりはましだと自分を慰めている。この詩は菅茶山に「是竹枝真趣⁽¹³⁾」と評されている。

3. 薩摩詞

薩摩、今の鹿児島県。『山陽詩鈔』で「薩摩詞」八首を収め、外国(琉球、朝鮮)との交流や薩摩地域の特色が詠まれている。たとえば、その第二首、

路遇朝鮮俘獲孫、窯陶為活別成村。可憐埴得扶桑土、造出當年高麗盆。

読み下し：路に遇う朝鮮俘獲の孫、窯陶活を為して別に村と成り。憐むべし扶桑の土を埴り得て、造り出す 當年の高麗盆。

薩摩焼は日本の代表的な陶磁器であり、その歴史は、「文禄慶長の役」といわれる豊臣秀吉の朝鮮侵略と深い関係がある。この戦争によって朝鮮半島より俘虜され連れられた陶工たちは陶芸の技術をもたらし、その末裔が「薩摩焼」を開花させ

(13) 『山陽詩鈔』卷三の頭注による。頼山陽。『山陽詩鈔』。大阪：青木嵩山堂、天保4年(1833)刊、早稲田大学柳田文庫蔵。

た⁽¹⁴⁾。

また、第八首

螺青闊畫兩脩蛾、六拍齊謳白水歌。誰謂銀簪學時様、児家要壓鬢髻髻。

読み下し：螺青闊く畫く 兩脩蛾、六拍齊く謳う 白水の歌。誰か謂う 銀簪は
時様を学ぶと、児家壓せんと要す 鬢髻髻。

自注：薩有泉謠六調子者、三四用謠詞。

「螺青」とは黒に近い青色のこと。ここでは眉を描くものを指す。陸游「練塘」の詩に「水秀山明何所似、玉人臨鏡暈螺青」とある。「闊畫」は眉の間のひろさという。杜甫「北征」の詩に「移時施朱鉛、狼藉畫眉闊」とあり、張籍「倡女詞」に「輕鬢叢梳闊掃眉、為嫌風日下樓稀」とある。「脩蛾」は細長い眉の喩えである。白居易「憶舊遊」に「脩蛾慢臉燈下醉、急管繁弦頭上催」とある。「児家」は古代の若い女性の自称、また自分の家の意もある。崔顥「代閨人答輕薄少年」に「児家夫婦多輕薄、借客探丸重然諾」とあり、朱彝尊「鴛鴦湖棹歌」に「北斗闌干郎記取、七星橋下是児家」とある。「鬢髻」は髪の毛が乱れているさま。『文選』郭璞「江賦」に「紫榮熒曄以叢被、綠苔鬢髻乎研上」という句があり、李善注に「『通俗文』曰、髮亂曰鬢髻」とある。

この詩は薩摩の出水の歌謡を取り入れている。山陽の自注でわかるように、「白水」とは「泉」（「出水」と同音）であり、このところに泉謡という六調子の歌があり、この詩の三、四句はその歌の歌詞に基づいて作った。これは竹枝詞の「采風」という機能を果たしていると思われる。

(14) 『薩摩風土記』『伊集院のつば屋の記』にその記載が見られる。「朝鮮人なり、むかし朝鮮の戦はて、此土焼物工五人召連、この所において御用やきものをさせ候、この所より平沢御領分にわかれあり、殿様江戸御道中、御本陣此つば屋年寄やく相勤申候。この日、焼もの御覧なり。この村、町家数五家程あり、名主庵のとおり一字苗字、名は二字なり、頭は琉人の通りなり。(中略) 此つば人鹿児島にとびん、つば、ちょか、すり鉢、いろいろの鉢焼ものを馬に付出すに。馬引は唐人のあたま、日本のきものにて、をかしき形ちなり」。高橋駿雄氏『薩摩風土記』翻刻と現代文訳註を参考にした。

二、竹枝詞に関する言説

十八世紀後半、市河寛斎(1749-1820)の「北里歌」の出現を機に、市河寛斎をはじめとする江湖詩社の活動によって、日本詩壇における竹枝詞の作風が大いに変わり、遊廓と関連付けられていた。津田左右吉はこの時期の竹枝の特徴を「繊細な官能的写実的の描写をする点⁽¹⁵⁾」と指摘している。京都では、中島棕隠(1779-1855)の活躍が目覚ましく、その代表作の『鴨東四時詞』が大好評を博し、菊池五山(1769-1849)も「詩極清婉、雖有継者、竟不能出其右⁽¹⁶⁾」と高く評価した。

しかし、頼山陽は中島棕隠の『鴨東四時詞』に対して厳しく批判している。それが文化十二年(1815)八月廿九日菅茶山宛ての手紙に見られる。

其(梅辻春樵-筆者注)友に彼中島文吉(棕隠)と申、是は御存の先年有穢名候もの、近来、自江戸帰、鴨東四時詞と申一小冊を出、竹枝六十五首、猥褻瑣細を極申候。元来、竹枝と云もの、如何之物と云事を不知様に相見へ候⁽¹⁷⁾。

(「京儒者の内幕」)

中島棕隠の「鴨東竹枝」は数種の版本が存在し、上記の六十五首の版本は『鴨東四時詞』といい、文化十一年(1814)に刊行され、梅辻春樵の序文が見られる。「鴨東」とは、京都鴨川の東、すなわち祇園という花街のことであり、『鴨東四時詞』では祇園一带の遊廓の風習や冶遊の情状が詠まれている。山陽はこれらの詩作について、「猥褻瑣細を極め申し候」と酷評している。また、棕隠のことについて、「竹枝と云もの、如何之物と云事を不知様」と批判している。ここで分かるように、明らかに山陽は『鴨東四時詞』のような「遊里竹枝」について認めないし、竹枝詞の本質から離れているものであると考えている。

では、山陽が考える竹枝詞というのは、一体何であろうか。

頼山陽の竹枝詞に関する直接的な論説は多く残されていないが、「論詩絶句」や「跋南海手書竹枝卷」などから、その考え方を窺うことができると考えられる。

(15) 津田左右吉、「文学に現れる我が国民思想の研究－平民文学の時代」、『津田左右吉全集』別巻第五、1966年、p345。

(16) 菊池五山、『五山堂詩話』巻四、文化七年刊、国文研蔵。

(17) 徳富猪一郎、木崎愛吉、光吉元次郎 共編、『頼山陽書翰集』上巻、民友社、1927年、p222。

頼山陽は文政十年(1827)に「論詩絶句」二十七首を作り、其の第十一首は日本竹枝詞の濫觴と言われる祇園南海の竹枝詞について論じている。

儻儻縹緲恰相宜、猥瑣何堪被肉絲。 欲把金丹換凡骨、試吟南海竹枝詞⁽¹⁸⁾。
読み下し：儻儻縹緲として、恰も相宜し猥瑣、何ぞ肉絲を被るに堪へん。金丹を把りて凡骨に換へんと欲せば、試みに吟ぜよ 南海の竹枝詞

また、「跋南海手書竹枝卷」にもこの詩と呼応する論述が見られる。

裕齋(栗津裕齋―筆者注)所藏南海先生竹枝詞、為_レ其集中最妙之作_一。(中略)余嘗論_二竹枝一体_一、要在_下質俚儻儻中寓_二縹緲之音_一不_レ失_中歌謠本色_上。而紀_二風土民俗_一、可_レ備_二考證_一、則最盡_レ善者耳。(中略)清人楊次也作_二西湖竹詞_一、務言_二瑣細難狀之事_一、盖宮詞一派非_二其正体_一。耳食者爭模_一倣_二之_一、猥瑣淫褻、筋肉畢露、呼_レ之曰_二竹枝竹枝_一。安得_二南海一粒金丹_一、治_二其俗骨_一也⁽¹⁹⁾。

この二つの詩文を合わせてみれば、山陽が思う竹枝詞の要は「質俚儻儻の中に縹緲之音を寓す」ことにある。「質俚」は質朴的、俚俗的という意味で、「儻儻」は元々音が粗野で荒々しい様をいい、劉禹錫は「竹枝詞九首」の序文において、竹枝の楽曲を「儻儻不可分」と記述している。ここでは、竹枝詞の表現が洗練されずにざらついていることを指すと考えられる。すなわち山陽にとって竹枝詞は質朴的、俚俗的でありながらも縹緲の意を失ってはいけないものである。さらに、風土民俗を記して後日の考証に備えることもできれば、最善であると考えられる。「猥瑣淫褻」「筋肉畢露」はおそらく当時詩壇で風靡している遊廓を主題とする竹枝詞への批判であり、前述した中島棕隠の『鴨東四時詞』も其の一つであると考えられる。また、「金丹換骨」という語は陸游の詩によると考えられる。陸游「夜吟」の詩に「六十余年妄学詩、工夫深处独心知。夜来一笑寒灯下、始是金丹换骨时。」とあり、銭仲聯氏が「金丹換骨と云うものは、蓋し以て詩歌を学ぶ工夫が

(18) 木崎愛吉、頼成一共編、『頼山陽全書・詩集』、頼山陽先生遺跡顕彰会、1931年、p601。

(19) 頼山陽著、兄玉慎輯録、『山陽先生書後』、大阪春和堂、出版年不明、早稲田大学花房文庫蔵。訓点は筆者による。

漸修より頓悟の境界に入ることの喩えである⁽²⁰⁾と注している。山陽は「金丹」を以て南海の竹枝詞を称え、「俗骨」を以て当時詩壇の遊廓を詠む竹枝詞を貶している。

また、「跋南海手書竹枝卷」によれば、山陽は祇園南海の竹枝詞に共鳴するのみならず、楊次也の竹枝詞には嫌悪感を持っていることが明らかになる。

祇園南海の「江南歌」十二首は「江南」すなわち和歌浦一帯の自然環境、物産、労作及び風習などを詠じていると同時に、遊女の歌の歌詞も取りいれ、青年男女の情愛についても詠じている。祇園南海は「江南歌」の序文において創作の動機について述べている。

(前略) 及_レ明楊鉄崖_一、作_二西湖竹枝詞数篇_一、和者百余家。吴中女薛氏亦倣_レ之。作_二蘇台竹枝数十篇_一、為_二鉄崖_一所_レ称。余嘗読_レ之、其詞俚而不_レ俳、質而不_レ野、述_二風俗_一、説_二事情_一、大得_二風人之旨_一、且其格調不_レ與_二声律曲促之近体_一同_上也。因聊倣_レ之、作_二江南詞十余篇_一⁽²¹⁾。

南海は「蘇台竹枝」を読んで「俚にして俳ならず、質にして野ならず」と好評し、それに倣って「江南歌」を作ってみたと述べている。「風人」とは、中国古代における民間歌謡や風習などを調査採集する役目を担った官吏のことを指し、『文心雕龍』『明詩』には「王澤殄竭してより、風人采を輟む⁽²²⁾」と記されている。「蘇台竹枝」は「風俗を述し、事情を説く」作品であるため、「風人の旨を得た」ものと言える。これにより、南海が竹枝詞の役割などについてどのように認識していたかをうかがい知ることができる。

この「蘇台竹枝」は元の薛桂英、薛蕙英が蘇州をテーマとして詠じた作品で、『歴代詩話』の記載によると、薛氏二女は楊鉄崖の「西湖竹枝歌」が風靡しているのを見て、「西湖有_二竹枝曲_一、東湖獨無_二竹枝曲_一乎」と言い、「蘇台竹枝」十首を詠んだのである⁽²³⁾。この十首の竹枝詞には、蘇州の姑蘇台、虎丘山などの風景を詠じる詩と、当地の物産である金柑や銀魚などを詠じる詩が見られる一方、男女

(20) 錢仲聯校注、『劍南詩稿校注』。上海古籍出版社、2005年、p3068。

(21) 祇園南海著、田中响峨編、『南海先生集』。1784年、新潟大学佐野文庫蔵。

(22) 戸田浩曉訳註、『文心雕龍』(上)。『新釈漢文大系』第六十四卷、明治書院、1974年、p99。

(23) 清・呉景旭輯、『歴代詩話』卷七十、文淵閣四庫全書本。

の恋を詠じる詩も三首見られる。南海の「江南歌」と比較してみれば、南海が遊女の歌を取り入れているところを除いて、両者は基本的に一致している。すなわちその地の風土と男女の素朴な感情を詠むことに主眼が置かれている。一方、遊女の歌を詩に取り入れることは、竹枝詞の根本である「采風」という機能を發揮していると思われる。

楊次也の「西湖竹枝」は袁枚の『隨園詩話』に収められ、中国ではそれほど有名ではなかったが、当時の日本詩壇における袁枚及びその性霊説への傾倒によって、日本でそれなりに影響をもたらした。「西湖竹枝」は少年男女が春遊を機に人目を避けながら密会することを描いている作品である。袁枚は『隨園詩話』において、李嘯村の「虎丘竹枝詞」を「已極新艷」と評し、楊次也の「西湖竹枝」については「乃更過之」と述べている⁽²⁴⁾。さらに「仿元遺山論詩」では「最是淫思兼古意、西湖堤上竹枝歌⁽²⁵⁾」と評している。しかし、山陽は袁枚とは真逆な意見を持ち「盖宮詞一派、非其正体」と批判している。ゆえに、「耳食者」がそれを倣って詠じた遊廓主題の竹枝詞は無論「猥瑣淫褻、筋肉畢露」、竹枝詞の正体ではないと思われる。

以上で明確になるように、山陽が求めている竹枝詞の本質には二つの要素があると考えられる。

まず、竹枝詞は地方で流行した民間歌謡から生まれたのであれば、「歌謡の本色」を失ってははいかない。「歌謡の本色」を損なわないためには、「質俚儻俚」と「縹緲の音」の共存が求められる。具体的に言えば、「質俚儻俚」には二つの側面が含まれている。まず一つ目は、言語の分かりやすさ、すなわち通俗さである。簡潔で分かりやすい言葉を使い、すぐに理解し、覚えることができるように作られるのが理想的である。このような表現が民間に広まり、共有されることにより、本来の歌謡の「本色」が維持される。二つ目の側面として、民間歌謡の多くはその地域特有の風土や文化、季節行事などに根差しているため、竹枝詞にも土地の風習や自然環境が反映されていることが重要とされている。地域ごとの独特の風土や生活感情、風習を率直に描き出し、装飾を最小限にすることで、竹枝詞における「質俚儻俚」の質素さや親しみやすさが強調されるのである。一方で、この

(24) 清・袁枚、『隨園詩話』巻五、清同治八年刻本。

(25) 清・袁枚著、周本淳標校、『小倉山房詩文集』、上海古籍出版社、1988年、p688。

ような素朴で通俗的な側面を持ちながらも、「縹緲の音」、すなわち超越的脱俗的で高雅な響きを持つことも求められる。俗に流れすぎず、自然や生活に根ざしつつも奥深い趣や美を感じさせる「縹緲の音」を含むことが、竹枝詞の詩情をより豊かにし、単なる民間歌謡から一段上の文学作品としての詩の価値を与えることができると思われる。楊次也「西湖竹枝」や中島棕隠「鴨東竹枝」のような遊廓主題の竹枝は人々の情欲や冶遊の情景に焦点を当てた描写になりがち、人間の欲望や官能的な側面を直截に表現する傾向が見られ、「縹緲の音」を喪失し、本来の竹枝詞に求められる詩情が失われやすいので、頼山陽は「猥瑣淫褻、筋肉畢露」「竹枝の正体にあらず」と痛烈に批判している。

次に、竹枝詞には「風土民俗を記して考証に備える」というつとめがある。劉禹錫は「竹枝詞九首」の序文において、その創作の意図を明言し、「後之聆巴歎、知變風之自焉」の句から、彼が後世を意識しながらこの作品を作ったことが読み取れる。頼山陽が祇園南海の「江南歌」を賞賛したのは、「江南歌」に反映されている風土の描写が、彼が竹枝詞に求めた風土記録としての要素を満たしているからだと考えられる。

三、頼山陽竹枝詞の特徴と位置付け

1. 頼山陽竹枝詞の特徴

以上で述べた頼山陽の竹枝詞に関する認識と彼の竹枝詞創作を照らし合わせ、また従来の日本の竹枝詞と比較してみると、その特徴は明らかになると考えられる。頼山陽の竹枝詞は、単なる風景や感情の描写にとどまらず、地域性や時代性、そして詩としての文学性が兼ね備えられている点が際立っている。

「地域性」について、新稲氏が「山陽にとって竹枝詞とは、本質的にその濫觴の劉禹錫の竹枝詞のように、地方の素朴な町や村が舞台になる郷土色の強いものだった⁽²⁶⁾」と指摘している。「郷土色」とはその地方ならではの風土や人情であると思われる。頼山陽は旅に来ていた、一人の「外来者」として、地元の人よりも鋭くその地域の特色に気づくことができると考えられる。したがって、地域ごと

(26) 新稲法子、「竹枝詞の変容——詩風変遷と日本化」、『文化装置としての日本漢文学』、勉誠出版、2019年、p84。

に、竹枝詞の作風も異なる。山陽との交情が深い篠崎小竹(1781-1851)は、「長崎謡、首首皆婉。薩摩詞、首首皆壯。其風俗自爾」と評し、「長崎謡」と「薩摩詞」がそれぞれ異なる作風を持つ理由として、それぞれの土地の風土や人情の違いが反映されていることを指摘している。この評価は、頼山陽の竹枝詞が単に地域の風景を描くだけでなく、各地の文化や情感を色濃く表現していることを示しており、地域ごとの特色が詩の内容や調子に影響を与えている。それに比べて、遊廓を題材にした竹枝詞は、江戸の遊廓吉原や京都の遊廓祇園を詠んだりするなど、一見場所が異なるように見えるが、その内容には類似性が高い。遊廓竹枝詞は、主にその場所における官能的な情景や情欲、また遊女たちの生活を描写することに集中しており、場所が違っても共通するテーマが表現される傾向が見られる。このため、地域性が強調された竹枝詞とは異なり、遊廓竹枝詞は風土や人情よりも、社会的なテーマや人間の欲望に焦点を当てた内容になりがちである。そのため、風俗や地域の文化を反映した竹枝詞とは顕著に異なっている。

一方、「時代性」とは、その作品が特定の時代に特有の特徴や傾向を反映しているということである。頼山陽は『日本外史』を著し、歴史家として名を馳せたため、彼の竹枝詞には単なる観察にとどまらず、歴史的な深みや背景が反映されていると考えられる。たとえば、「長崎竹枝」では、洋船の入港時の警備体制が描写されることで、長崎の対外交流の歴史やその役割が自然に連想される。また、「薩摩詞」において、朝鮮人の末裔が薩摩焼を作ることに触れることで、豊臣秀吉の朝鮮侵略という日本と朝鮮との歴史的な関わりが想起される。これに対して、遊廓を題材にした竹枝詞では、特定の歴史的背景や時代性を強調することはあまりない傾向がある。遊廓に関する描写では、情欲や社交生活といった即時的な情景や人々の感情に焦点が当てられ、歴史的背景よりもその場の雰囲気や感情が重視されることが多い。頼山陽の竹枝詞は、地域や時代の背景を意識的に取り入れ、歴史的な視点を持ちながらも、風土や文化を表現する点で独自性が際立っている。

また、頼山陽の竹枝詞は「西遊詩」の一部として、旅中の見聞や感想を記録しており、「紀行詩」の側面を持つと考えられる。中国における紀行詩の発展と流行は、唐宋時代に始まり、特に唐代の王勃や杜牧、宋代の蘇軾、范成大や陸游などの詩人が紀行詩を盛んに詠んだ。彼らは、地理的な視点だけでなく、旅行先での感動的な経験や社会情勢に対する洞察を詩に反映させた。明清時代には、紀行詩

がさらに発展し、さまざまな地域や文化を描いた紀行詩が多く生まれた。特に清代では、広大な版図と発展した交通網、さらには政治・経済の発展が紀行詩の創作を促進する土壌を提供した。この時期、士人たちは扈從や官職に伴う移動、交友や学問のための旅行、名山名所の訪問など、さまざまな理由で旅行し、その経験を詩に記録した。例えば、王士禛は蜀地や南海、華山を巡る紀行詩を残し、袁枚や趙翼も同様に、旅先での経験を詩にし、紀行詩の創作に深く関わった。頼山陽もまた、この流れに位置し、彼の竹枝詞には単なる旅行記録を超えた深い歴史的背景や文化的洞察が込められている。彼の竹枝詞は、旅を通じて観察した風俗や文化、さらには歴史的な出来事を表現することにより、紀行詩としての側面が際立ち、「紀行竹枝」とであると言える。

竹枝詞は本来、民間歌謡から生まれたものであるため、言語は通俗的であり、俚俗的なものが多く含まれている。頼山陽の竹枝詞は、このような通俗的で質朴な作風を保ちながらも、典故や洗練されたイメージを取り入れることで「俗にして雅あり」を実現している。例えば、「赤関竹枝」其二に見られる「至今許著輕羅襪、應記朝天凌綠波」の句は、曹植「洛神賦」における「凌波微步、羅襪生塵」という表現を巧みに借用したものと考えられる。また、「薩摩詞」其五には「憶得劉郎舊詩句、煙波深處是琉球」の句があり、詩末に「結禹錫全句」の自注が記されており、劉禹錫の詩句を取り入れて薩摩と琉球の関係性を暗示している。このように、頼山陽は竹枝詞に歴史や文学の典故を巧みに組み込み、詩に深みと奥行きを持たせた。民間の通俗性にとどまらず、文学性を付け加えることで、従来「文学性に欠ける」とされがちだった竹枝詞に新たな価値を与え、俗と雅の調和を見事に表現していると言えるだろう。

以上のように、頼山陽の竹枝詞は、「紀行詩」としての性質を色濃く持ちながら、竹枝詞の「采風」機能を活かし、地域ごとの特色を鋭く捉えている。また、時代背景や歴史的な文脈を巧みに織り込み、各地の風土や人情を生き生きと描き出すだけでなく、豊かな文学性も加えられている。こうして頼山陽の竹枝詞は、地域の風俗や歴史の趣を伝えつつも、文学作品としての魅力をも備えたものとなっている。

2. 日本竹枝詞史における位置付け

従来の日本竹枝詞史に関する研究を見れば、一般的には日本江戸時代の竹枝詞

の発展を三つの段階に分けて論述している。例えば、揖斐高氏は祇園南海「江南歌」などの初期の竹枝詞を第一段階とし、市河寛斎「北里歌」をはじめとする遊里風俗詩としての竹枝を第二段階としている。そして、幕末期の地方色に立脚した生活風俗詩としての竹枝を第三段階としている⁽²⁷⁾。この分け方によると、頼山陽の竹枝は第二段階と第三段階の接続と過渡期に位置している。

頼山陽以前の竹枝詞は、風土を記述するものも一部に見られたが、その数はごく限られており、遊里竹枝が絶対的な主流を占めていた。その原因については、既に先学が指摘しているとおり、楊維禎や袁枚の影響が大きかったと考えられる。一方、頼山陽以後の竹枝詞は、日本幕末漢詩壇における南宋の田園詩の流行の影響を受け、地方の生活や風習を素材とするように変化した。頼山陽の竹枝詞は、ちょうどこの転換点に位置し、竹枝詞の新たな発展の端緒を開いたものであると思われる。

また、頼山陽竹枝詞の特徴と彼の竹枝詞に関する認識は、同時期の清の竹枝詞の発展傾向にも一致している。例えば、清の詩人袁学瀾(1804-1879)は「姑蘇竹枝詞」を作り、その跋文において、「今按夢得竹枝詞、(中略)大約其詞文雅、不失風人之旨」「要冀不悖乎夢得溫雅之旨⁽²⁸⁾」と述べている。また、「続詠姑蘇竹枝詞百首」の序においても「竹枝之曲、陳民風者也。使采風者聞之、(中略)於以知民俗之貞淫奢儉、政治之良苦惇薄」と、竹枝詞の本質的な機能について述べている。さらに彼は、「然世之為此體者、多綺麗側豔之詞、少古質殫樸之意、淫哇迭唱、桑濮靡靡、床第之言、竟逾于閼、忠厚之旨失、諷喻之意微、有心世道者、于此有詩亡之嘆焉⁽²⁹⁾」と述べ、近來の竹枝詞は冶遊や情欲に偏った内容が多く、忠厚な精神や諷刺の意が失われ、民俗や社会の真の姿を表す機能が弱まっていることを嘆いている。この主張は、清代の文人たちが竹枝詞に対して持っていた認識や創作の傾向を代表するものであり、「質俚儉儻の中に縹緲之音を寓す」と論じた頼山陽の見解とも合致していると思われる。

日本竹枝詞史の視座で見れば、日本の竹枝詞は中国の竹枝詞と別の道を進んで「変異」して遊廓を主題とした竹枝詞を生まれたが、この時点において竹枝詞本来の姿である「風土詩」へと引き返す姿勢が現れるようになった。

(27) 揖斐高、「竹枝の時代－江戸後期の風俗詩－」、『江戸詩歌論』、汲古書院、1998年、pp.153-182。

(28) 清・袁学瀾、『適園叢稿』巻四。同治十一年(1872)序、香溪草堂刻本。

(29) 清・袁学瀾、『適園叢稿』巻五。同治十一年(1872)序、香溪草堂刻本。

おわりに

本稿では、頼山陽の竹枝詞が持つ独自の特徴と、その文学的意義について考察し、その新たな位置付けを提示した。頼山陽は竹枝詞に「質俚僉儻の中に縹緲の音を寓す」という理念を込め、風土や民俗を記録して後世の考証に資する姿勢を重視しており、その作品には地域性、時代性、そして詩の文学性が融合している。この視点から、山陽の竹枝詞は従来の遊廓を主題とする日本竹枝詞とは異なる「紀行詩」としての性質を持っている。それにより、頼山陽の竹枝詞を日本竹枝詞史という広い視野で再評価し、「紀行竹枝」としての新たな位置付けを構築した。

今後の課題として、頼山陽の竹枝詞形成における影響要因や、竹枝詞が「西遊詩」全体における位置付けについてさらに深く掘り下げることで、山陽の竹枝詞の意義をより明確にしたい。

参考文献

- 頼山陽、『山陽詩鈔』。大阪：青木嵩山堂、天保4年（1833）刊，早稲田大学柳田文庫蔵。
 頼山陽著、児玉慎輯録、『山陽先生書後』。大阪：春和堂，出版年不明，早稲田大学花房文庫蔵。
 三宅観校注、『山陽詩鈔集解』。佐々木惣四郎，1881年。
 奥山正幹校注、『山陽詩鈔註釈』。山陽詩鈔出版会，1914年。
 蜂谷柳莊校注、『山陽詩鈔註釈』。大鐙閣，1919年。
 徳富猪一郎、木崎愛吉、光吉元次郎 共編、『頼山陽書翰集』。民友社，1927年。
 揖斐高、『江戸詩歌論』。汲古書院，1998年。
 蔡毅，「試論頼山陽對中國古典詩歌傳統的繼承和創新」，『日本漢詩論稿』。中華書局，2007年。
 佐藤利行、李均洋、趙敏俐主編，『菅茶山・頼山陽漢詩研究』。北京：商務印書館，2018年。
 新稲法子，「竹枝詞の変容——詩風変遷と日本化」，『文化装置としての日本漢文学』。勉誠出版，2019年。
 谷口匡，『西遊詩巻：頼山陽の九州漫遊』。法藏館，2020年。

